

1. 自然神学とその再構築	
2. 「宗教と科学」関係論の基礎	
前期講義のまとめ - 後期への導入として -	10/7
3. 現代の環境論とキリスト教思想	
創造論と環境 - いわゆる人間中心主義について -	10/14
自然神学の生命論と環境破壊 - 近代の諸相 -	10/21
環境破壊の原因を問う - 欲望論 -	10/28
環境破壊を超えて - ヴィジョン・希望・共感 -	11/11
4. 現代の生命論とキリスト教思想	
展望 - 自然神学の可能性 -	12/16

3. 現代の環境論とキリスト教思想

1. 創造論と環境 - いわゆる人間中心主義について -

1 - 1 キリスト教と環境破壊との関係 - 問題状況 -

1. キリスト教思想は、現代の環境危機や共生といった課題に対して、いかなる有効なメッセージを有しているのか。宗教哲学的あるいは組織神学的考察から、聖書学的、キリスト教思想史的研究、そして倫理的実践神学的議論(政治的経済的な問題を含む)まで、多岐にわたり、さらに、そこに参加する思想家や研究者としては、ローマ・カトリック教会から、プロテスタント諸教派、そしてオーソドックス諸教会まで、多様な立場。

1 - 2 聖書の創造論と環境

(1) 支配とは何か

2. 「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』」(創世記一章二六 二八節)

3. 現代の環境破壊のイデオロギー的責任は、聖書の創造論にまで、つまりキリスト教思想の核心点にまで遡及するか。

「支配」とは、戦争による征服(カーバシュ)、他人を支配する権威・生存のための農業経済としての家畜の管理(ラーダー)。

4. 「支配」の文脈1: 人間における「神の像」(Imago Dei)の問題。人間の固有性。

5. 古代イスラエルにおける「支配」の意味。

古代の王権論からのアプローチ。古代オリエント的な専制君主的支配?

6. 「イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、彼に申し入れた。

『あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかの

すべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。』裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。」(サムエル記上 八章四 六節)

「ところが、アンモン人の王ナハシュが攻めて来たのを見ると、あなたたちの神、主があなたたちの王であるにもかかわらず、『いや、王が我々の上に君臨すべきだ』とわたし(サムエル、引用者補足)に要求した。」(同書一二章一二節)

7. 反王権思想：神のみが王と呼ばれるにふさわしい、人間が人間を支配することは正しくない。

イスラエルの王：地上における神の代理(神の特権の保持者)ではなく、基本的には軍事指導者あるいは諸部族の利害の調停者。

生命体相互の間に生じた争いを調停し(=裁く)、環境の保全に努める役割 神の像にふさわしい責任を果たすこと。エデンの園におけるアダム役割。

8. 「しばしばユダヤ - キリスト教的伝統は、自然に対する人間の権力掌握と人間の無節制な力への意志とに責任があるとされる。すなわち、この伝統が人間による地の支配を規定している。そのために、この伝統は自然の世界を脱デーモン化し脱神化し、人間の世界を世俗化したのである。しかしながら、このいわゆる聖書の<人間中心主義的世界観>は、三千年より遙か以前のものであるが、近代の科学 - 技術文明の発展はヨーロッパにおいてせいぜい400年前に始まったにすぎない。したがって、この発展には、別のより決定的な要因が存在したのでなければならない。」(Moltmann[1985],S.40)

9. では、どこから破壊は生じたのであろうか。

- ・ 伝統的に悪の起源として取り上げられてきた創世記第三章の墮落物語
ノアの洪水に至る一連の破壊の起点、罪の現実としての環境破壊
- ・ 近代(少なくとも産業革命、あるいは二〇世紀以降): 人類が環境の大規模かつ修復不可能な破壊能力を獲得した。

(2) 支配から連帯へ

10. 「支配」がすべてか。

11. 近代以降の聖書に関する学問的研究全般(聖書学や神学だけでなく、哲学や宗教学にいたるまで)における二分法とその限界。

古代イスラエル宗教：遊牧文化に基づいた一神教、反自然的な歴史的宗教

周辺の多神教的な農耕文化に基づいた宗教：自然の豊饒や生産性を崇拜する自然宗教

12. 古代イスラエルの宗教を理解する上で、自然と歴史、農耕と遊牧、という二分法に単純に依拠することは適当ではない。 二つの人間と自然との関係モデル：

「地の支配」と「地の僕」(PとJ)

小農民アダム、聖書的農本主義(?)、都市の技術文明批判

13. 「これが天地創造の由来である。主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。」「主なる神は、土(アダム)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる

神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。」「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』」「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。」(創世記二章四 五、七 九、一五 一七、一九節)

14. アダム (=人間): 土から生まれ、土を耕し 「耕す」とは、「仕える」「働く」を意味するアーバドから作られた言葉、土に帰る存在者 = 「地の僕」としての人間。

15. 人間と他の生命体との同質性・連続性。関係性。

破壊と呪いの連帯性 + 契約 (約束) と希望の連帯性

16. 「『わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。』」(創世記九章九 一〇節)

17. 「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」(ローマ八章一九～二二)

(3) むすび

18. モデル: 現実 (内と外) の開示 (第二度の指示、ヴィジョン) 複数性と相補性

19. 創造から終末へ

「地の支配」と「地の僕」(人間の固有性と自然との連続性) との終末論的統合

不思議な動物の相互関係 (共生?) の終末的ヴィジョン

20. 「狼は小羊と共に宿り / 豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち / 小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ / その子らは共に伏し / 獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ / 幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては / 何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように / 大地は主を知る知識で満たされる。」(イザヤ書一一章六 九節)

21. 神を知る知識で満たされた大地の存在と「子ども」。

エコロジカルな知恵: 自然の他の生命体と連帯しつつ、自らに課せられた責任を果たす人間のあり方の姿 (無垢なる超越的なものへと開かれた子ども)

<文献>

- 1 . Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press 2000.
- 2 . 安田治夫 「リン・ホワイト再考」、『福音と世界』1995年4月号 新教出版社
- 3 . Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr. Kaiser 1985.
- 4 . Theodore Hiebert, *The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions*, in: Hessel/Ruether[2000], pp.135-154.
- 5 . 水垣 渉 「「神の像」と「人間」 - 古代キリスト教における思想形成の前提と条件について - 」、『哲学研究』第 568 号（一九九九年、pp.1-19）、第 570 号（二〇〇〇年、pp.1-19） 京都哲学会。
- 6 . 並木浩一 「旧約聖書の自然観」、『旧約聖書における文化と人間』教文館 一九九九年、pp.178-211。
- 7 . 松永希久夫 『歴史の中のイエス像』NHKブックス 一九八九年、pp.80-100。
- 8 . Martin Noth, *Geschichte Israels*, Vandenhoeck & Ruprecht 1950 (1956), S.152-165.
- 9 . Theodore Hiebert, *The Yahwist's Landscape. Nature and Religion in Early Israel*, Oxford University Press 1996 pp.3-29.
- 10 . Gerhard Liedke, *Im Bauch des Fisches. Ökologische Theologie*, Kreuz Verlag 1979 S.109-152.
- 11 . 高木仁三郎 『市民科学者として生きる』岩波新書 一九九九年。
- 12 . Donella H. Meadows, et al., *Beyond the Limits*, Chelsea Green Publishing Company 1992 pp.224-226.